

EDplace | 96

日本デザイン学会
環境デザイン部会機関誌
EDプレイス 第96号 2023年

目次

巻頭言・地方都市を舞台とした「まちづくり」の実践

————— 1

■特集 「あまべ文化研究所」遠隔リモート・ヒアリング、事前見学会の報告

————— 2-9

■特集 日本デザイン学会第2支部企画見学会

『How is Life? — 地球と生きるためのデザイン』を観覧して

————— 10-11

研究ノート 横浜美術大学 ————— 12-13

連載・動物園のデザインサーベイ 横浜市金沢動物園

————— 14-16

事務局報告 ————— 16

発行日＝令和5年3月27日

発行人＝

佐々木美貴 mikisans1@gmail.com

編集＝

上綱久美子 tandk@sepia.ocn.ne.jp

川合康央 kawai@bunkyo.ac.jp

小泉雅子 koizumim@tamabi.ac.jp

山内貴博 yamauchi-t@g.kyobi.ac.jp

◆日本デザイン学会環境デザイン部会事務局

〒605-0991 京都市東山区川端通七条上ル

京都美術工芸大学 工芸学部建築学科

山内研究室気付

TEL 075-525-1515 FAX 075-533-6033

Mail 平松早苗 jssd-ed_hira@mbr.nifty.com

巻頭言

地方都市を舞台とした「まちづくり」の実践

三寺潤（福井工業大学 環境情報学部デザイン学科）

環境デザイン部会の皆さま、初めまして。昨年、部会に入会させていただいた福井工業大学 環境情報学部 デザイン学科の三寺潤と申します。地方に立地する私立大学（学年定員500名、学生数2283名）で女性研究者として、大学では学長補佐、そして2022年春に新しく設立された「まちづくりデザインセンター」のセンター長も務めており、持続可能な社会の構築に向けた様々な実践的な取り組みを進めています。

まずは、私の経歴を簡単にお話ししたいと思います。生まれも育ちも福井ですが、大学で建築を学んだ後、大阪の建築設計事務所（組織事務所）に就職し、主に公共施設の建築設計を行ってまいりました。その際、ひとつの建物のデザイン性だけでなく、都市全体の計画の必要性を感じ、大学院に戻り、建築とは異なる土

木、都市計画、都市デザインの世界へ足を踏み入れることとなりました。大学院博士後期課程（28歳）のときに子どもを授かり、地元に関わり、地元で研究活動を行っている次第です。研究としては、地方都市における「公共交通を中心としたまちづくり（交通×環境×土地利用）」をメインテーマとし、「地方都市のモビリティと都市デザインとの関係性」、そして最近では「観光まちづくり」もキーワードに加え、研究やまちづくりの活動を進めております。

2000年以降、人口減少社会という言葉を目にする機会が増えました。ネガティブな側面だけで捉えられがちですが、それを都市再生の機会、希望と捉え、多くの地方都市に目を向けなければならないと考えております。都市の再生は大都市のみで行なわれるものではなく、日本の

大多数を占める地方の小さな都市に対して最も考えていかなければならない課題でもあります。我が国の地方都市がもつ個性豊かな「地域特性」や「風土」を考慮して、きめ細やかな視点で研究や地域活動、まちづくりを進めることが急務とされています。

前職では工学部、いわゆる理系の学生とともに調査・研究活動を行ってまいりましたが、現職のデザイン学科には得意な分野が異なる多様な学生が在籍しています。地域に根差した「まちづくりの専門家」を育てることを目指し、学科が持つ多様性を活かした研究やまちづくりの活動を環境デザイン部会でも発表していきたいと考えています。今後ともよろしく願っています。

「あまべ文化研究所」 遠隔リモート・ヒアリング、事前見学会の報告

はじめに

環境デザイン部会の2022年度年間テーマは「サステナブル環境デザイン〜SDGs」です。2011年度以降続いた「震災後の環境デザイン」などを経て、2016年度「これからの仕組み―持続可能な環境デザイン」などからの近年の流れを継続しつつ、世界全体で取り組んでいるSDGsへのED部会員の研究等を共有し、発信するとしています。

ここでは、部会の研究・見学担当による活動事例の紹介として、持続可能な地域の内発的発展を目指し、古民家を拠点に様々なイベント、調査、講座などの活動を行っている「あまべ文化研究所」様の事前見学会と遠隔リモート・ヒアリングを報告します。

「あまべ文化研究所」事前見学会

2022年11月27日(日) 10:00～14:00
杉下哲(東京工芸大学)

「あまべ文化研究所」(大分県佐伯市戸穴字中間1304-1)の事前見学会を行いました。

「あまべ文化研究所」は、岩佐礼子氏が代表で、2017年に開設されています。豊かな海と山に囲まれ、古い歴史を持つ海部郡や海人族の風土や文化を象徴する「あまべ」を名に、大分県佐伯市の築163年の古民家「遊志庵」を拠点とし、四つのアプローチ(足元を知る、ものづくりと技の継承、深く学ぶ、交流を通して学び情報交換する)とスタンス(学びを堅苦しくとらえず、自由自在な発想から生まれる、予測不可能な創造的展開に価値を置く)をもとに、ソーシャルビジネス(社会的企業)としての経営を目指しています。

広く地域は、大分県と愛媛県に挟まれて太平洋と瀬戸内海につながる豊後水道に沿い、その両岸は九州山地と四国山地が終わる所で、岬と入り江が交互するなかに島々がある典型的なリアス式海岸です。入り江奥に広がる佐伯市は、外海性魚類(アジ、サバ等)と内海性魚類(タイ、イカ等)などによる水産業、真珠やブリなどの養殖業が盛んです。農業は米作のほか柑橘類栽培、季節毎の産物が、更には牛・豚飼育などが行われています。画像①:位置図

近隣の地域はJR九州の海崎駅などがある八幡地区で、所在は戸穴(ひあな)の河内(こうち)です。八幡地区は、過去には合板やセメントなど工場が立地されて栄えましたが、現在(2020年度調査)は総人口2983人、高齢化率45.2%で、人口減少や少子高齢化、地域衰退などの課題を抱えています。戸穴の河内は、三方を山に囲まれた扇状地で、海に向かって下がる平地に田畑が広がり民家が点在しています。それらは、後継者不足による遊休農地・耕作放棄地などと思われる空き農地が散見され、空き家も多くある様です。いくつかの空き農地ではソーラー発電設備が施設されてもいます。画像②:位置図

事前見学会では、「遊志庵」の内・外をご案内いただき、施設概要のご説明を受けました。以下に、その要旨とともに、受けて思った今年度年間テーマに関わる観点をキーワードに整理します。

「遊志庵」は、山に向かって大きく屈曲する4m程の道を導入路に、海側へ開かれた平地にあります。お風呂の別棟と代表のご自宅を両側に、南方へ向かう姿は、日の光を浴びる心地良い日常を想像させてくれます。画像③～⑥:現地写真

内部は、出入り口の土間を上がると広間や小客間、厨房、トイレなどの1階とゲストルームの2階、小屋裏空間で構成され

ています。広間(20畳程)は、縁側カフェなどの場所貸しや屋内イベントなどを行っているとのことで、30名程が利用できる様です。中ほどに設けられた暖炉は、暖房であるとともに、落ち着いた施設の佇まいを象徴しています。小客間(四畳半程)は、個室使いや金継ぎ作業などで臨機応変に活用されています。厨房は、縁側カフェはもちろんイベントとしても、プロの料理人が使える仕様になっているとのことです。画像⑦～⑬:現地写真

外部は、砂利敷きの前庭が垣根を通して空き農地(他家からの借地)につながり、見通し良く開放的です。東側の裏山は、他家との共有とのことですが、お茶などの自生植物を野草塾などに活用しつつ、先々は森に戻すなどを考えているとのことです。空き農地では、ダイズやソバ、アズキなどの作物を育て、イベントで活用しているとのことです。画像⑭⑮:現地写真

内・外空間は適度にまとまり、どこを取り上げても活かされた場づくりがされていることがわかりました。

キーワードは以下で、環境デザインの持続可能性を捉える大切な観点ではないかと考えます。

■信念と実行:岩佐氏のご経歴から

根底に流れているのは信念で、その上に実行があります。ひとつひとつの積み上げが、持続可能性を高めているとわかりました。

■場と仕組み:「遊志庵」とその周囲から

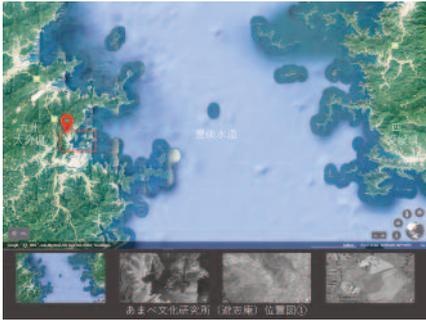
人が関わる場と仕組みが持続可能性を形にしています。それらを永く成り立たせるのは緩やかな関係づくりとわかりました。

■時宜と継続:会を終えた所感から

持続可能性は結果とも言え、自らができることを、自らのタイミングで始め、自ら続けていくことが大切とわかりました。

ご説明の詳しい内容は遠隔リモート・ヒアリング報告によります。

●事前見学会画像



①位置図



②位置図



③施設エリアの導入路



④施設：遊志庵



⑤施設：遊志庵



⑥離れ：お風呂



⑦1階：出入口



⑧1階：出入口



⑨1階：広間



⑩1階：厨房



⑪1階：暖炉



⑫2階：ゲストルーム



⑬天井：小屋裏



⑭裏山



⑮施設前（空き農地：借地）

●「あまべ文化研究所」遠隔リモート・ヒアリング

2022年12月4日（日）10:00～12:00

岩佐礼子（あまべ文化研究所 代表）

今日お話しすることは、以下の六点となります。

1. あまべ文化研究所の紹介
2. 遊志庵（建物）について
3. 研究・調査について
4. 地域づくり（地域と学校・大学と連携した地図作り）
5. その他の活動
6. 佐伯市民大学講座について

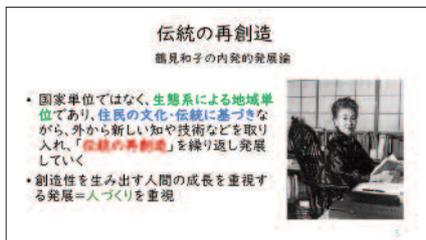
1. あまべ文化研究所の紹介

私は2014年3月に東京大学新領域創成科学研究科で環境学の博士号を取得し卒業し、その夏に佐伯に戻り、出版の原稿作成にとりかかりました。翌年3月に学術書『地域力の再発見』（藤原書店）を出版し（画像①）、その後、自分の研究を活かして地元で活動をしたいと思い、その拠点としての古民家を日本全国で探し回り、最終的に地元佐伯で自分の祖父の生家を発見しました。

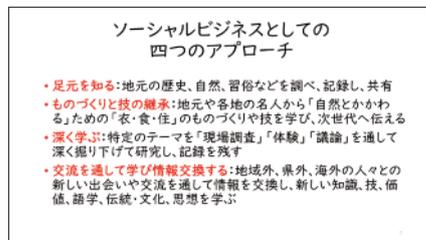
●遠隔リモート・ヒアリング画像



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨

この古民家を1年間の設計期間と1年間の建築期間を経て再生し、2017年4月29日にあまべ文化研究所の拠点「遊志庵」としてオープンしました。

私の研究の核となっているのが社会学者の鶴見和子（1918～2006）の内発的発展論です。それは、国家単位ではなく、生態系による地域単位の発展であり、住民の文化・伝統に基づきながら、外から新しい知や技術などを取り入れ、「伝統の再創造」を繰り返し発展するという定義で、創造性を生み出す人間の成長、つまりは人づくりを重視しているのです（画像②）。

どういう体制で活動するのか、ということでNPO法人を最初に思いましたが、その場合、管轄される特定の省庁のルールに縛られ、自由に活動できないという課題がありました。会社法人も小資本で始められるものの、利益を生み出すことが目的としたら難しいので、県の起業推進団体や佐伯市の商工会議所などにも相談しました。結局、起業ということで、従業員もなく、一人で始めることもあり、最も簡単でやりやすい自営業を勧められました。

せっかく博士号を取得したからには「研究者（researcher）」としての活動も続けたいが、地域社会に貢献し、環境に配慮するライフスタイルを提案するために、自分が関心あること、やってみたくことを仕事に（ソーシャルサービス）したいし、そのためには収入を得る仕事も必要（ビジネス）、ということで、ソーシャルビジネスを選びました。

ソーシャルビジネスとしてのアプローチは、①足元を知る、②ものづくりと技の継承、③深く学ぶ、④交流を通して学び情報交換する、の四つで、活動拠点となる「遊志庵」の「遊」が示すのは、学びを堅苦しくとらえず、自由自在な発想から生まれる、予測不可能な創造的展開に価値を置くというスタンスです（画像③）。

活動は、まずは自分がやってみたくことを企画し、儲けというより、とんとんでよいから、まずはやってみることから始めました。場が与えられれば、関心ある人は集まってくるし、人が集まればこちらから情報を発信できます。人のつながりで新しいチャンスや企画が生まれます。遊志庵のスペースは、詰めても30人、

テーブルだと16人ですが、このサイズが自分のキャパシティと実感し、これ以上人を集める無理はしないようにしています。SNSは有効な情報発信ツールですが、やはり口コミは強いと実感。2020年からはコロナ禍でオンラインによるヴァーチャル交流が増える中、やはり対面で体を使って感じ、技を体得することを重視したいと考えています。「ものづくり」や「食」を通した「人づくり」が一貫したテーマです。

研究所の名前をどうするかを熊本県水俣市在住の「地元学」の祖、吉本哲郎氏に相談したところ、「生活文化研究所」を提案されました。ただ、松場夫妻が石見銀山生活文化研究所をすでに開業され、古民家再生など、類似の活動をすでにされていました。そこで、もっと地元色を出したいと考え、「あまべ文化研究所」に決定したのです。佐伯市のある県南では、古くから豊後水道で漁業や水運を生業としていた人々を海人（あまべ）と呼んでいました。北海部郡（佐賀関）、南海部郡（弥生町）などの地名は消滅しましたが、佐伯では「あまべ商工会」など、名称としてはなじみあるものなので採用しまし

た。「あまべ文化」の研究所ではなく、「あまべ」という地域の文化研究所の意味です。

2. 遊志庵（建物）について

大学院の環境学や環境教育の研究で風土と文化、地域に根ざした共育（内発的共育）を求めて各地の農村地域の調査を実施しましたが、そこで建築材料が自然素材でエコなのに伝統建築の民家が次々と解体され、それに伴い、伝統建築にかかわる職人と技も喪失しているという事実を知らされました。

そういうこともあり、佐伯に戻り、自分の仕事場として古民家を再生することを決意し、日本民家再生協会の会員になり、日本全国の古民家を登録した「民家バンク」（持ち主は家を無料で提供）を活用し、山口、筑波、川口で四軒を見ましたが、案内してくれた建築士から移築は高額なので地元で探すようにアドバイスされました。そこで、佐伯で古民家を探していると、ある時、母が祖父の実家のことを思い出し、探したところ、まだ家が建っていたのです。（画像④と⑤）

中を調べると屋根裏に棟札があり、安

政6年（1859年）に建てられたと判明。曳家工事をしている地元の業者に相談したところ、熊本市の古川保設計士を紹介していただき、調査を実施していただきました。（画像⑥）

ヤマトシロアリの被害があり、天井の部分は梁など状態が良いが、床下はほぼ全て劣化しているとの結果でした。6割再利用できなければ費用対効果が無く、普通は断るが、この家は5割なので、施主が決めてくださいと言われ、是非再生していただきたいと設計を依頼しました。後でわかったのですが、古川先生は朝日放送の「劇的ビフォーアフター」の番組で2014年の匠が選ぶビフォーアフター大賞に選ばれていた方でした。

そういう背景もあり、祖父の家でビフォーの会を開いて市民を招待し、廃屋でも良い材料でできていれば再生可能であり、古民家を伝統構法で再生するとどうなるかを一般市民に知ってもらうため、再生した前と後を比較してもらうことにしました。ビフォーの会当日は、驚くほど多くの人々が集まってきました（画像⑦）。口コミの力は凄いと思いました。古川先生による内覧、外覧のあと、近くの公民



10



11



12



13



14



15



16



17



18

館で軽食を提供して、伝統構法についての古川先生のスライドを参加者に見ていただきました(画像⑧と⑨)。おそらく佐伯市では初めての本格的古民家再生工事でしたが、人々の関心はとて高いことが分かりました。

再生工事は1年かかりましたが、土壁を使う伝統構法を一般の人にも知ってもらうため、「土壁塗りワークショップ」を開き、大人から子供まで16人が参加して、にぎやかに土壁塗り体験をしました(画像⑩と⑪)。最初の一部解体工事でスカスカになった家を見て驚きましたが(画像⑫)、設計士さんや宮大工の凄腕職人さんの素晴らしいチームワークで(画像⑬)、その後屋根が新しくできあがり(画像⑭)、最後には古民家とは思えないほど見違えるように美しく再生されていったのです(画像⑮)。

遊志庵のお披露目となるアフターの会は2017年4月29日に午前50名、午後50名の合計100名を招待して実施しました(画像⑯と⑰)。遠くからは私の指導教授ご夫妻が東京から、研究調査でお世話になった宮崎県綾町上畑地区の皆さんなどが駆けつけてお祝いしていただきました(画

像⑱)。

3. 研究・調査について

佐伯に戻ってからも、以下の二つの研究・調査の機会を与えられました。

●2015年3月～2016年7月：宮崎県高千穂町の土呂久公害調査(現地や宮崎での調査期間：)を実施。学術論文は2017年に東京学芸大学『環境教育』第26号に掲載。

●2016年3月～2020年8月：JSTの戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発)「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発プロジェクト「分散型水管理を通じた、風かおり、緑かがやく、あまみず社会の構築」に共同研究者として参加(九大、東大、九州産業大、福大、熊大と地元グループ)。

特に土呂久研究については、公害関係の講演依頼も下記のように3回ありました。

●2018年11月：「第23回アジア地下水ヒ素汚染フォーラム in 宮崎」で土呂久公害の発表。

●2019年11月：倉敷での第12回公害資料館連携フォーラム分科会で「土呂久の環境と歴史をフットパスで学ぶ」を発表。

●2022年8月：宮崎県主催「宮崎の土呂

久公害に学ぶ」で土呂久と佐伯市との関係について発表。

土呂久研究では、記録作家として土呂久公害について著作出版や新聞連載をされている川原一之さんに資料収集などでお世話になり、あまべ文化研究所主催の講座や佐伯市民大学の講座の講師をしていただきましたし、「あまみず社会」研究リーダーの島谷教授も、2023年の佐伯市民大学講座の講師を依頼していますので、自分の共同研究参画が、佐伯での市民活動につながり、横の広がりに発展していることを実感しています。

4. 地域づくり(地域と学校・大学と連携した地図作り)

あまべ文化研究所がオープンして間もない2017年5月から8月にかけて、大分大学地域創生インターンシップ集中講座で大分大学と協定を結び、地域調査による地図作成活動を実施しました。

学生は、大学2年生中心の6人(工学部、経済学部、教育福祉学部)と4年生2人のスチューデントアシスタントで、遊志庵で5回の週末合宿を経て、西上浦と大入島の地域調査を実施し、大入島にはフェリ



19



20



21



22



23



24



25



26



27

ーを使わず狩生からボランティアの船長が操縦するヨットで往復という恵まれた環境でした(画像19)。

学生たちは住民が大切に思うローカルな風景やモノの写真の説明を聞き取り、レポートにした後、ドローンで撮影した集落にその写真を落としていきました(画像20)。

こうして9集落を含む西上浦地区全体の地図と各集落の地図ができあがったのですが、西上浦地区振興協議会はこの成果を高く評価し、これらの地図をベースに西上浦地域振興協議会の事業として、プロのイラストレータによる西上浦全体のA3サイズ地図と9集落の地図冊子を2018年に完成しました(画像21)

さらに2019年8月から2020年3月にかけて、古江集落に特化して、これまで得た情報や地図を参考に、立命館アジア太平洋大学(APU)の大学生と彦陽中学校の子どもたちが1日かけて共同調査し手書きのフットパス地図を作成しました(画像22②③と24)。

この地図をベースに、イラスト化した古江集落のフットパス地図が翌年3月に完成しました(画像25)。裏を英語訳にして、

インバウンド需要を見込み、地域活性化を目指したものでしたが、今はコロナ禍が収束するのを待っているところです。

しかし、一番大切なのはプロセスであり、中学生の子どもたちが、留学生と一緒に作った地図づくりを良い思い出にして、将来佐伯を離れても子どもたちがふるさとへの関心を持ち続けることを願って実施したのであり、西上浦地区としては今後もできる限り地元の子どもたちを巻き込んで、各集落のフットパス地図を作っていく予定です。

5. その他の活動

遊志庵では多岐にわたる活動を実施しています。使用料を取って場所を貸す活動は主に以下の通りです。

●縁側カフェ：週一回、若い二人の女性が運営。一般の人にまず遊志庵に来て、伝統構法の家や、研究所の存在を知ってもらう一番の方法(画像26)

●野草塾：月一回、専門家を呼び、野草を採取し、料理して食べる(画像27と28)

●金継ぎ教室：月一回、割れたりひびの入った食器類を金継ぎ技術を専門家から習って修理して再利用する(画像29)

●モノづくりグループの展示販売イベントや蚤の市(画像30)、コンサート(画像31)

その他、特に力を入れているのは食育活動としての農業体験です。遊志庵の前にある畑を無料で借り、毎年有志で有機農業体験を実施。これまで大豆を育てて味噌と醤油を手作り(画像32③と34)、蕎麦を育てて、そば打ち体験)や、大豆と小麦で醤油づくりをしたり、小麦粉を育てて、うどん打ち体験など実施しました(画像35③⑥⑦⑧と39)。これらは種をまくことから作物を育て、収穫したものを手作りで加工していただく、時間はたっぴりかかりますが、感動の体験で人気があります。

モノづくり体験としては、遊志庵の裏山に自生するお茶の木を茶摘みをして、自分たちで深蒸し茶をつくる試みをし、親子の参加者に好評でした(画像40)。

2017年から2019年まで、年に四か月連続して、あまべ文化研究所主催の有料講座を実施しました。

自分自身が興味ある分野の講師をお呼びするのですが、特に2018年はアウトドアで実施するフィールド講座が好評でし



28



29



30



31



32



33



34



35



36

た(画像④②と④③)。

6. 佐伯市民大学講座について

最後に、佐伯市の政策企画課が主催する佐伯市民大学「令和四教室」の講座についてお話しします(画像④④と④⑤)。この講座は私が発起人となって立ち上げた「地元学の会」が委託されて運営しており、現在大学生から74歳までの15名の会員が登録して活動しています。私は講座コーディネータとして、講座の内容や講師の選択、講師との連絡、予習講座の担当をやっています。

あまべ文化研究所主催の有料講座では、予算に限界があり、招待する講師も非常に限られていましたので、佐伯市の力を借りて、自分が研究した「内発的発展」論に関する専門知識のある方々を全国各地から講師に招き、2年半かけて学んでもらうことが可能になったのです。

3年間の講座の最後の6か月はグループ研究チームを立ち上げ、自主的な研究をし、2024年9月に市民の前で発表する予定となっています。

グループ研究のテーマは「地域づくり」であり、3年間を通し、講座で知り合った

受講生がお互いを良く知り、理解し、共に学び、研究して、最終的に講座が終わった後も、内発的発展を目指した地域づくりの実施を目指して、協力し合う関係を構築してほしいと考えています。

今後のあまべ文化研究所の方向性ですが、地元の河内区は高齢化が進み、情報発信が難しく、2019年10月に移住してきて以来コロナ禍で一度も地区総会が実施されていないのが現状です。私も正式には地元の皆さんにご挨拶できないままになっています。

2017年の遊志庵のオープニングには、それでもある程度の地域住民が参加してくれましたが、2020年からのコロナ禍で、かわりは希薄になってしまいました。

一方、2020年5月に突然知らされたのが、佐伯市で計画されている3か所の150~200m級のメガ風力発電建設のことで、遊志庵の背後にある彦岳山系も計画範囲になっていました。そこで、佐伯市の環境審議会でも知り合った日本文理大学の教授と八幡地区区長会と連携して、風力発電の勉強会や、ウィンドファームの

視察、企業側を招待した会合、地区による風力発電計画に関するアンケートなどを実施しました。結果として、企業はメガ風力発電建設計画を断念したのです。

こうして地域にとって大きな課題に取り組んだ結果、八幡地区の区長の方々と知り合いになる良いきっかけになりました。

これまでの活動を振り返ると、多様性に富んだ研究所の活動によって、多様性に富んだ人々が集まってきました。そのなかで、継続的にサポートしてくれる仲間ができてきました。年会費も、役員会議もない、緩いつながりだからこそ仲間とのつながりが持続していると私は考えています。

この先もあまべ文化研究所が持続していく鍵は「自然とのかかわり」ではないかと思います。自然は常に自分の周りにあり、恵みを与え、我々の感性、知性と技を磨いてくれるのです。そして、自主的に手伝ってくれる仲間との関係性を大切に、今後も地域に根差した活動を続けていきたいと願っています。



③⑦



③⑧



③⑨



④①



④①



④②



④③



④④



④⑤

清水泰博（東京藝術大学）

今回お話しして頂いた岩佐さんは私と同世代の方です。成人後、故郷を離れずずっと東京で生活されていた人が、ある年齢を経て自身の故郷に戻り、その地で新たな活動をしようとされた経緯を知る貴重な機会となりました。帰郷のきっかけや経緯、そこでコミュニティを作ろうとされている活動の全般、またその現状をお聞きするのはとても興味深いものでした。

戻られたきっかけはご自身の相続や残され廃屋となった古民家があったとのことですが、それを今の制度等の中でどう以前のように（またそれ以上に）リノベーションしようと進められてきたのか、また今の活動状況はどうであるのかがリアルに示されました。

今はこの岩佐さんのように地方に移住される方が少なからず見られるようです。そこには大都市ではどうしても行き過ぎた資本主義社会の実情を実感してしまうことへの疑問があるとは思いますが、個人の発信がネット環境によって自由になった今だからこそであり、人口の少ない地方にいても多くの人と繋がれる時代になったこと、またその呼びかけに応える人々が実際にいることを実感しました。

私は東日本大震災の折に「持続可能な近隣コミュニティの再生」の必要性を強く感じ、その後このテーマを大学院学生への課題としています。このことは震災を契機に知ったことでしたが、災害地となった東北はずっと身近に人々が繋がっていた場所であり、復興と同時にその繋がりの喪失が懸念されたからです。それと裏腹に東京などの大都市ではSNSの発達によって加速したのですが、遠くがよく知らない人たちとの繋がりが増えるのと反比例するように、近所の人との関わりが希薄になりつつある状況に疑問を感じたからでした。そのように少し悪者扱い？していたSNSが実は地方ではより良い方向に向かう可能性を秘めていると感じることが出来、期待感を感じさせてくれる意見交換会でした。

平松早苗（合同会社ars設景）

昨今、古民家のリフォームは人気で、かくいう私も実家の古民家をリフォームしています。先祖代々の家を残したいと思いと、単純にリフォームが面白そうだから、そんな理由でお金と時間を割いています。大がかりなところは大工さんをお願いし、DIYでできるところは自身で作業をしていると、ご近所さんに「戻ってきたの？」とか、「何ができるの？」とか聞かれ、何がいいですかね〜、アイデアありませんかね、と答えている状況です。

「遊志庵」は、元はおじい様の生家ということですが、岩佐さん自身は再生に取り掛かる以前にはこの建物のことをご存知ではなかったということです。「遊志庵」の古民家再生は伝統的工法で再生され、土壁塗りのワークショップや建築過程を見せるビフォーの会・アフターの会を開催されるなど、個人の情緒的な思いや古民家リフォームへの興味というところは違う視点で再生を実施されたと思いました。

「遊志庵」では、有機農業で作られた野菜を使って食品を作るまでの食育活動など、地域に根付いた「伝統の再創造」の一過程を実行されています。ここはご自身の研究・実験の場であり、関心事であるソーシャルサービスの実践の場として創造されたもので、岩佐さんはここに住み、活動を繰り返し発展することで、創造性を生み出す人づくりを継続されるのでしょうか。来場者の多くがご近所さんというより遠方からわざわざ来られているというのも、「遊志庵」に地域コミュニティや古民家リフォームだけでない付加価値を見出されているからかとも思われました。

では、私の実家は建物を直してどうする？まだ答えは出ていませんが、とても興味深く、有意義なお話が聞けました。

杉下哲（東京工芸大学）

「サステナブル」「SDGs」や「サステナビリティ・持続可能性」などの言葉は、1987年頃や2015年頃から広く使われる様になり、それ以前に日本で、デザイン思想では「メタボリズム」「新陳代謝」など、歴史的には「常若」「式年遷宮」などに通じると思います。時代とともに、常に人とある概念や目的などであり、具体や方法などを指すと思います。今日では、私たちそれぞれに、自分事としての役割と実践が求められています。

参加しては、「自分と同様な思い」を共有し、「自分がすべきこと」を自問しました。

共有では、特に日常における手詰まり感や経済中心への違和感などで、それらを克服して求められる解決につなげる私たちの役割と実践です。地域を超えた社会的課題を解決するためにビジネス手法を用いて取り組むのは、デザインからも貢献できることです。

自問では、1950年代生まれで同じ時代を生きてきた現在の、手のひらから日々こぼれ落ちる様な感覚のなか、先ずは1890年代頃の祖父母世代や1920年代頃の親世代から、次世代へ中継ぎとして継承する私たちの役割と実践です。デザイナーは良き生活者であることにも通じます。

自分しかできない、自分がやるしかないことを考え実行に移す、背中を押してくれた機会でした。

日本デザイン学会第2支部企画見学会

『How is Life? —地球と生きるためのデザイン』を観覧して

上綱久美子 (design office kk)

1. はじめに

去る2022年12月5日(月)16:00～、TOTOギャラリー・間の企画展である当展覧会を観覧した。日本デザイン学会会員および学生合わせて10名ほどの参加者で、休館日の当日15:00～と16:00～の二回の展覧見学会を当ギャラリー館長の橋田氏が付き添ってガイドして下さった【写真1】。

当企画展は、塚本由晴(建築家、東京工業大学大学院教授)、千葉学(建築家、東京大学大学院教授)、セン・クアン(建築史家、東京大学特任准教授)、田根剛(建築家)の4人がキュレーターとなり、持続的成長ではなく成長なき繁栄を本気で検討しなければならぬところまで来ている人類の活動への問いかけを「How is Life?」という建築展の形にする試みである(開催期間2022.10/21-2023.3.19)。以下、その展覧会見学の報告を記す。

2. 成長なき繁栄を、われわれはどう生きるのか?

まず、TOTOギャラリー・間の3階の展示入口で受付を済ませて、最初に目すべきものは、今回の企画展用に選書された本の数々である【写真2】。中でも核となる書籍は、『成長なき繁栄-地球生態系内の持続的繁栄のために-』ティム・ジャクソン著 田沢恭子訳である【写真3】。筆者は未読のため、本書の内容について言及できないが、展示会場では、この書籍のそばに、縦長の短冊状の印字用紙が置いてあり、そこに記されている「How is Life? を読み解くためのキーワード」がそのまま、成長なき繁栄をどう生きるか、デザインキーワードになっているのではないかと理解した。それらキーワードは次の通りである。

都市農、修繕、生態系、サルバージュ、都市のランドスケープ、家庭、家族、公共性、診断、フィールドラーニング、普請、後背地、マテリアルフロー、土地、環世

界、行動主義、循環、資源、連関、当事者、生命、衛生、私設公共、道具、資源的人、食、所有、障壁、モビリティ、サーキュラーエコノミーの30語である。

会場内には、さまざまな主体者のプロジェクトがテキストパネル、模型、実物、写真、動画などの媒体で展示されている。各展示のそばには、プロジェクトの概要とキュレーターのコメントが印字された短冊状の用紙がたくさん置かれていて、観覧者が気になったプロジェクトの短冊状の用紙を集めて、好きな色の表紙にセットし、会場出口で簡単に製本して持ち帰ることができる、という、インタラクティブに記録できる楽しみが施されている【写真4】。

3. いくつかのプロジェクト展示の様子

展覧会場は、上階下階の2階に分かれて21のプロジェクトが展示されている。入口受付のある下階で圧倒的な存在感を放っていたのは、「小さな地球」の鉛筆画の



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5-1



写真5-2



写真5-3



写真6-1



写真6-2



写真7-1



写真7-2



写真8-1



写真8-2

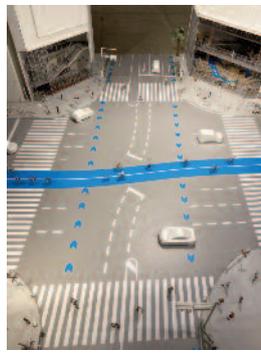


写真8-3



写真8-4



写真8-5



写真8-6

ドローイング、それと呼応するような「Tool Shed」の里山地域（いわゆる田舎）における出展プロジェクトの現場で使用されるで使用する実物の道具類のディスプレイである。

「小さな地球」は、千葉県鴨川市の棚田集落で、キュレーターの1人である塚本氏と当地へ移住した林氏、福岡氏が「小さな地球」を設立し、里山の再生を行なっている活動をドローイングによって記録したものだ【写真5-1, 2, 3】。「小さな地球」の活動は、2019年の台風で林氏の古民家が被災したことがきっかけで、棚田での米作りから耕作放棄地や山林の環境整備、古民家の再生、そのコミュニティスペースとしての運営まで、里山の暮らしに密着した多様な活動を展開している。ドローイングの数々はそれらの活動の記録である。鉛筆による手書きのドローイングは、写真や動画とは異なるインパクトを放つ。SNS、バーチャルツール、動画など多様なインフォメーションコミュニケーションツールが氾濫している現代において、フリーハンド表現に新鮮味や安心感をおぼえる。と同時に、里山や田舎の世界観がフリーハンド表現に妙にマッチしているようだ。

「Tool Shed」は、木を挽く大鋸や田んぼを整える鍬、茅草を仕上げる鍬、石を持ち上げる鉄の棒など、「小さな地球」の

現場で用いられる道具を展示している。各道具は固有の材料・作業に紐付き、それに合わせた名をもつ。道具のモノとしての存在感と名称としての意味性・表現性が共鳴しあって、人々の生活文化に根付いてきている物語性を感じる【写真6-1, 2】。

下階から上階への動線上の中間に、屋外テラスがある。そこでは3つのプロジェクトが展示されていて、うち2つは実物模型の展示である。その中でも「茅草普請」はそのスケールの視覚的なダイナミック性と茅の素材感と香り、触覚性という総体的情報量に圧巻する【写真7-1, 2】。

上階には、12の作品が展示されていて、下階およびテラスの展示同様、其々のプロジェクトの思想・概念、試みの理念など十人十色で大変興味深いし、デザイン思考を触発される。上階の展示で存在感を放っているのは、「Bicycle Urbanism」。東京をあらゆる交通手段からなる生態系とみなす場合、これまでそれは車や鉄道、歩行者の目線から捉えられてきたといえる。人間自体が動力となる身体性を持ち、気候条件にも左右される自由で不自由な自転車からこの世界を眺め、既存の都市を診断し、「自転車乗りから見た世界」としてその処方提案するプロジェクトである。原寸・縮小模型、地図や断面図、高低差がわかるモデルを構成したパネル

など多様な表現ツールをディスプレイしている【写真8-1~6】。

4. 観覧を終えて

本企画展の4人のキュレーターは、建築家あるいは建築史家である。彼らは、『建築が人々の暮らしをよりよくすることに奉仕するものであるならば、そうした包囲網を障壁として発見し、挑んでいくことから、建築的営為を始めるべきだろう。その時の話し合いのテーブルにつくのは、今ここにいる自分達だけでなく、立場の弱い人、地球の別の場所にいる人、未来の人、そしてヒト以外の生物かもしれない*』と語っている。（*当企画展示における冒頭パネルに記載）ここでの「建築」はそのまま「デザイン」に置き換えても良いだろう。

プラネタリー・バウンダリーを超え、声をあげることができない生物や将来世代を搾取し続け、持続的成長ではなく、成長なき繁栄を考えなければならないフェーズにある現在地からこの先、われわれはどう生きるか？ How is Life? 気の遠くなるようなこの壮大な問題を一度に解決できるわけではないのだから、いやだからこそ自分の生活や暮らしを見つめ直して、自分vs地球の視点で、どう生きるのか？ Covid-19の災禍を経て、それを考えるには良い時機であるとしみじみ感じた。素晴らしい企画展であった。

丁寧なガイドをしてくださった館長の橋田氏ならびにパートナーで本見学会コーディネイターの橋田氏（日本デザイン学会第二支部長）には心より感謝申し上げます。

【注】文中、当企画展示フライヤーおよび各展示プロジェクトの概要コメントより間接引用あり。

EDplace

研究ノート——横浜美術大学 美術学部 美術・デザイン学科 ビジュアル コミュニケーションデザインコース

ビジュアルコミュニケーションデザインコースでは2年次の前期後半で「ピクトグラム」「キャラクターデザイン」の2課題を課してゆきます。今回研究ノートをまとめてくれた二人は身近なところから問題定義をしてネットの情報に頼ることなく自らの足で情報収集し、教員とのデウスカッションを綿密に行っていました。現場で直に取材をして得た肌感覚を大切に制作できたと感じています。

田崎冬樹（横浜美術大学）

ドッグランのピクトグラム 辻ひめの（横浜美術大学 2年）

背景

ピクトグラムとは「絵文字」「代用言語」などと呼ばれる、何かの情報や概念を伝えるための視覚記号である。文字の認識が難しい状況においても、情報の伝達に効果的な点がピクトグラムの利点だ。

私が考える「文字の認識が難しい状況」は、大きく分けて2つ存在する。1つ目は、使用言語が異なる状況。2つ目は、早急な判断が求められる状況だ。絵で情報を伝達するピクトグラムは、文字を理解できない・読む隙もない状況において、特に効果を発揮する。そして今回私が着目したのは、2つ目の「早急な判断が求められる状況」である。

私は犬を飼っており、犬をドッグランに連れていく機会がしばしばある。犬とのコミュニケーションは難しく、行動を全て予測することは不可能であるため、予期せぬ事態や慌ただしい場面を数多く経験してきた。例えば、突然犬が用を足したがりはじめた時、犬用トイレエリアが見当たらない、といった事態だ。このような実体験から、ピクトグラムはドッグランのエリア表示に適しているのではないかと考えたのである。

目的

ドッグランは多くの犬と人が集まる場所

であるため、個人・複数人を問わずトラブルが発生しやすい。そのため、慌ただしい場面において、エリア区分などを即時に認識できることを目的とした。

また、ドッグランは飼い主が愛犬に運動を楽しんでもらうためにやって来る場所である。ポジティブな目的を持った場所であるため、ピクトグラムに優しい雰囲気を持たせることで、施設との調和を目指した。

初期構想

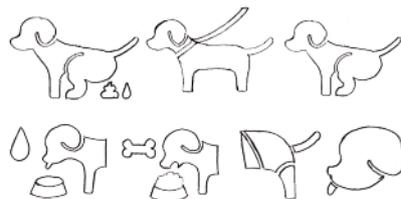


図1

耳の垂れた犬をモチーフに、全身を入れるデザイン案。要素を多くする代わりに、シルエットをかなりシンプルにしている（図-1）。

第2構想

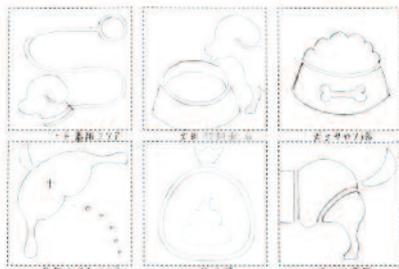


図2

表示を使用するエリアと基本の形を決定した。

上半身のみのデザインに変更し、画面の情報を減らしている。反対に曲線などシルエットの要素を増やし、認識性と犬らしさの向上を図っている（図-2）。

最終デザイン

面を用いたデザインにすることで、視認性を高めた。耳が立った犬をメインにすることで、遠くからもシルエットが認識しやすくなっている。全体的に曲線をモチーフとし、面の切り替わり部分にラウンド処理を施すことで、柔らかく優しい雰囲気を持たせている。

また、ドッグランは芝生の環境であることが多い。芝生の緑と反対色のピンク



図3

を背景に使用することで、即時の認識性を高めた。

「大型犬エリア」「小型犬エリア」の表示においては、表示頭数・犬の向き・体格の3要素での差別化を図った。「トイレエリア」の表示では、足を上げて用を足す犬ならではのポーズを使用し、シンプルな画面作りと犬の愛らしさの表現を目指した。機能性のみを追求したデザインではなく、ドッグランの明るい雰囲気に沿い、飼い主がつい微笑んでしまうようなユーモアを持たせることも意識している（図-3）。

最後に

デザインをするにあたって、目的や意図、制作上の課題への深い理解は、必ず求められるものである。今回の制作では、即時の認識性の向上を課題とし、ポジティブなイメージとの調和を目的とした。

案内表示としてのピクトグラムは、当該施設との調和が求められる。しかし今回のケースのように、必ずしも「馴染ませること」が調和と繋がる訳ではなく、常に課題・目的に応じたアプローチを探ることが大切であることを改めて学んだ。情報を絞ることが大切なピクトグラムの制作において、機能性のみを追求するのではなく、利用者の気持ちや感じ方を想像して工夫を凝らしたことが、今回の作品の完成に効果的であったと考える。

知り合いのお店のキャラクターデザインの提案

水戸部さくら（横浜美術大学 2年）

背景

母親の友人の息子さんが作る焼き菓子やケーキの完成度が高く、周りの友人に好評だった。そこで仕事の合間にお菓子を作って、食べてもらう為、家の一部を改装して、お菓子屋さんに来たらという話を母親が友人と会った時に聞き、試しにとお店のロゴ制作を頼まれた。そして、時期的に大学の授業課題のキャラクターデザインが重なっていたことと、自分自身の勉強の為、キャラクターデザインを同時に制作した。

コンセプト

仮のお店が「気ままなお菓子屋さん」という名前で、母親の友人のロゴコンセプトが柔らかく、あたたかく、近所の人親しみを持ってくれるようにして欲しいとのことだったため、キャラクターデザインもその方向性に合わせ、「気ままな主人とお菓子の妖精たち」と言うテーマにした。近所の子供が、「あのキャラクターたちのいるお菓子屋さんだ」と知ってもらうきっかけになってもらうため、妖精たちがいる絵本のメルヘンな世界を企画した。

キャラクターのデザイン

キャラクターのプロフィールを事細かく設定し、それを元にラフ画を描いていくと、思い浮かんでいたキャラクターの親しみさが感じられなかった。そのため、自分自身が知っているお菓子屋さんの親しみを感じるキャラクターをいくつか挙げ、共通点を見つけた。クッキーのステラおばさんやクリームシチューのクレアおばさん、チーズケーキのりくろーおじさんと全て、中年のキャラクターだった。そこから最初の段階では30代の若者夫婦に設定していたが50代の熟練夫婦に変更し、それに合わせ、ぽっちゃり体型とそれに合わせた可愛い二頭身の姿にした（図1）。

夫婦の雰囲気合うように可愛い妖精を作るにあたって、ポケモンのプリンや『千と千尋の神隠し』の坊やかしらのシルエットからインスピレーションを受け、クッキーの妖精のキャラクターデザインをした。

キャラクターの配色

夫婦の髪の毛の配色を決めるまでに時間がかかった。最初、赤髪や金髪にしていたが、髪色と50代に設定した夫婦が合っておらず、50代にイメージの白髪にすると、元気がなく見えてしまった。最終的にいつも見慣れている茶髪に落ち着いた（図2）キャラクターの全体を馴染むダルトーンとポイントのビビットトーンで

まとめ、老若男女を問わず、愛される配色にした（図6）。

パッケージのデザイン

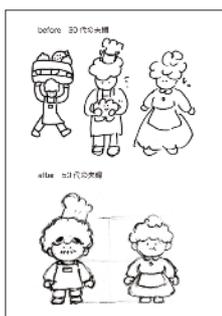
お店のキャラクターデザインを考えると同時に、今後どのように使われるのかの想定を考えた。クッキー缶に巻くキャラクターの絵柄が印刷された紙や小包、紙袋の閉じに使われるシール、カタログの一部、ショップカードなどキャラクターがあることでデザインする幅が増え、よりそのお店の印象が明快になった（図3、7）。

キャラクター、絵本との関わり

夫婦のキャラクターがどんな人で、どんな喋り方をするのか、妖精はどうやって誕生したのかそれぞれストーリーがある。それを視覚的に絵に描き起こすことで、お店とキャラクターの関わりがより深くなり、お店の印象が定着し、幅広い人に存在を知ってもらえることができる（図4、5）。

最後に

唯一無二のこのキャラクターは、そのお店の信頼性や広告性において重要な役割を持っている。パッケージや絵本からのビジュアルからブランディングし、お店とお店に来てくれるお客さんとのコミュニケーション場を作り出せるツールとして、このキャラクターデザインは期待できる。



上段 左から
図1：ラフ画
図3：ラフ画 パッケージデザイン
図4：ラフ画 絵本
図5：絵本完成形一部抜粋



下段 左から
図2：配色
図6：キャラクターデザイン最終
図7：世界観とパッケージデザイン

横浜市金沢動物園

上綱久美子 (design office kk)

横浜市金沢動物園（以下、金沢動物園）は、横浜市の代表的な3つの動物園のうちの一つで、1982年に開園した。昨年2022年で開園40周年を迎えた。当動物園の大きな特徴は、世界の希少草食動物を中心に飼育していること（肉食猛獣がいない）、最寄駅の京急線金沢文庫駅からJR鎌倉駅まで約14.5kmのハイキングコースの一部である金沢自然公園内に位置していることの二つといえる。

●動物園の母体である金沢自然公園

日本の動物園名称を見ると、○○動物園、△△動物公園が多く「公」が入らないの違があることに気づく。これは、当該動物園が「□□公園」に所属するかしないかの違いであるようだ。例えば、上野公園の中にあるから上野動物園、千葉市動物公園は、上野動物園のように母体となる公園がなく動物園だけなので、「動物公園」となる。簡単に言えば、「公」が入らないの違はそのように説明できそうだ。

横浜市の動物園名称の場合、金沢動物園は金沢自然公園にあり、野毛山動物園は野毛山公園にあり、よこはま動物園ズーラシアは横浜動物の森公園にあることで「公」が入らないことで理由が見つ

そして日本動物園水族館協会に加盟動物園90園のうち「～動物公園」の名称は11園と少ない。

ここで気づくことは、日本の多くの動物園は都市公園の中に所属しているということである。ここでは詳しくは触れないが、日本の動物園は、博物館法（文化庁）と都市公園法（国土交通省）の二つの法制度にまたがって設置運営する、いろいろな面で少し複雑な施設のようなのである。このことについては、また別の機会に考えてみたい。

金沢動物園は横浜市の南部に位置し、ハイキングコースでつながる円海山・北鎌倉近郊緑地保全区域や幾つかの市民の森など横浜市最大級の緑に囲まれた金沢自然公園（約60ha）内にある【図1】。丘陵地帯にあり、快晴時は房総半島を背景に東京湾が望める【写真1】。園内は動物園エリア（有料）と植物区エリア（無料）に分かれている。

●金沢動物園の環境特性

金沢動物園内は、世界の希少草食動物を生息地別にアフリカ区・オセアニア区・アメリカ区・ユーラシア区の4大陸に分けて展示、他にポニー、やぎ、ひつじなど家畜がいる「ほのほの広場」など

がある【図2】。1982年、野毛山動物園の分園として一次開園した当初は、アメリカ区にオオツノヒツジを中心に3種10点を展示していたため、同園のシンボルマークにはオオツノヒツジが使われている【図3】。1982年開園後、何度か拡張され現在12.8haの面積である。

動物園に入園してすぐのトンネルを抜けて、左にわくわく広場（売店、休憩広場、トイレ）、右にアフリカ区へつながる平坦な動線が広がる。動物園入口のトンネルは、空間の切替装置としてうってつけであるが、現在のトンネル内部演出デザインは子どもや若者に人気があるという声を聞く反面、筆者としては、現在の動物園の役割とこれからの動物園のあり方を示唆する新しい演出デザインを模索する必要性を感じるが、どうであろうか【写真2】。

アフリカ区以外の大陸区は丘陵地特有のアップダウンに合わせて配置されていて坂道が多い。特に、オセアニア区からアメリカ区をつなぐ東南の動線は、動物がいらない長い坂道となり、豊かな緑と東京湾への展望スポットがところどころある以外に公園機能として特筆すべき構成要素が見当たらない【写真3】。アメリカ区からユーラシア区にかけては急勾配の



図1 つながりの森エリア *注1



写真1 園内から望む東京湾



図2 金沢動物園園内マップ *注2

坂道が複数箇所あり、見通しの変化と空間の切替要素として能動的なデザインを試みても良さそうだ。

横浜市には金沢動物園のほかに、野毛山動物園（1951年開園）、よこはま動物園ズラシア（1999年開園）があるが、金沢動物園管理事務所の話によると、3園の中で金沢動物園は未就学児とその家族の来園が多いという。理由は、世界の希少草食動物（コアラ、カンガルー、ゾウ、オカピなど）が中心であること、金沢自然公園にダイナミックな遊具施設があることなどと思われる。それとは別に、金沢自然公園と周辺の広域ハイキングコー

ス利用者層（シニア、高齢者）もあり、現在この大きな二種類の利用者層の交流・相乗効果をはかった環境整備はまだ見受けられない。

●横浜美術大学との連携授業

筆者が非常勤講師で毎年担当する、横浜美術大学プロダクトデザイン3年生の演習授業がある。2021、2022年は、金沢動物園との連携授業として課題演習を行なった【写真4】。課題テーマは『動物園のストリートファニチュアデザイン』、アフリカ区とオセアニア区を結ぶ約200mの緩やかな坂道沿いを対象とするデザイン提

案である。同動物園と同大学の連携事業の一環としてこの連携授業を企画しているが、ねらいは、動物園の問題をデザインで解決するための試行として、学生・動物園・来園者がインクルーシブデザインの手法を用いて公共性、ユニバーサルデザイン、サステナブルデザインなどを学ぶことである。Covid-19感染拡大対策の必要性から、インクルーシブデザインに立脚した理想的な授業進行だったとは言い難かったが、学生らに金沢動物園の立場と現場状況をよく把握した上で動物園のストリートファニチュアデザインの提案に臨める授業フローとなるよう配慮した。「デザイン」するとは、デザインを施す「問題」を認識すること、その「問題」を分析してデザイン「解決」のトライアル&エラーを繰り返すプロセスを踏むこと、最後にわかりやすく伝えること（プレゼンテーション、実現化）のフローであり、それを動物園をスタディケースとして行ない、客観的に評価できることはもちろんのこと、デザインの対象者（来園者）にも見てもらうことを連携授業の目的ともしており、動物園に対しては「デザイン」の真意に触れていただく事業だと考えている【写真5】。当連携授業については、また別の機会で詳しくお伝えできたらと思う。

●まとめ

金沢動物園は、1970～80年代の動物園



図3 シンボルマーク *注3

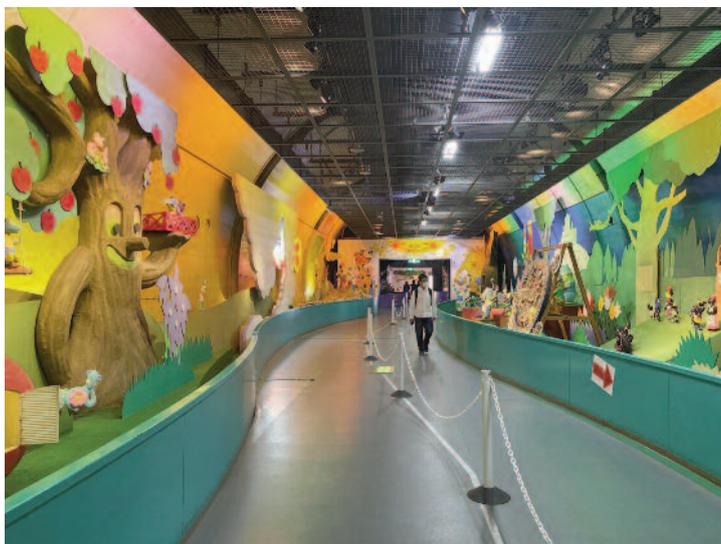


写真2 動物園出入口トンネルの内部

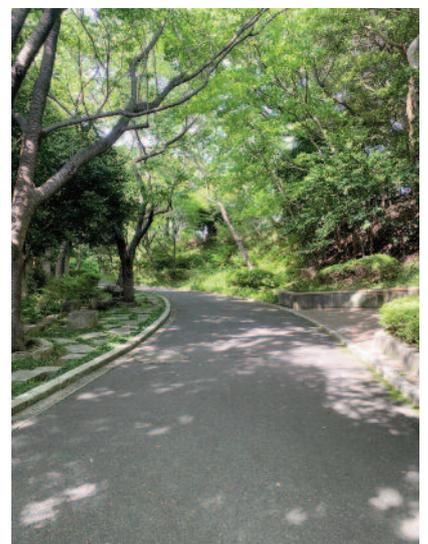


写真3 動物がない長い園路

建設ラッシュ期において横浜市で2番目の動物園として建設・開園した。1番目の野毛山動物園とはその立地と環境特性は大きく異なり、3番目のよこはま動物園ズーラシアとも動物園デザインのコンセプトが異なる。開園から40年過ぎ、園内の動物飼育環境デザインは、動物の福祉向上を目指す時代の需要に追いついていない

ところも多々あり老朽化・劣化等も見られる。動物のQOL向上のためにはたゆまぬ努力が必要であることは言わずもがなだが、金沢動物園を擁する金沢自然公園の大きな特徴の一つである緑の地域連携性は、動物を含む地域の多様な生物の拠り所（すみか）として将来に向けて持続したい宝である。地域の宝と世界の宝

(世界の希少草食動物など)、どちらも生命を考える上での平等な指標だとしたら、そこから金沢動物園のアイデンティティがより明確になるかもしれない。

*注1 横浜市環境創造局「つながりの森」構想 平成24年7月PDFより

*注2、注3 金沢動物園公式Webサイトより



写真4 園内で動物園職員にレクチャーを受ける学生ら



写真5 授業成果を園内で展示、来園者に見てもらう

事務局報告

●12月18日・1月12日・2月6日・3月13日にリモート幹事会を開催しました。

議題：

- ・EDプレイス発行について
- ・EDプレイス100号に向けての企画について
- ・見学会の報告
- ・JSSD春季大会のオーガナイズドセッションの企画検討

●JSSD春季研究発表大会のWebサイトが公開されています。

<https://confit.atlas.jp/guide/event/jssd70/top>

日程：2023年6月23日（金）～25日（日）

会場：芝浦工業大学豊洲キャンパス

（東京都江東区豊洲3-7-5）

テーマ：「学びのデザイン」

開催方法：（大会HPより）

「今回の大会は完全対面で実施されます。

プレゼンテーション接続・閲覧にZOOMを使用するため、参加申し込みいただいた場合はZOOMでも閲覧可能ですが、音声などの環境については保証できませんので、予めご了承ください。

久々にリアルでお会いしましょう。」

発表申込：3月1日（水）～31日（金）

参加登録期間：5月1日～6月21日

※参加登録開始は5月初旬を予定。

（事務局：平松早苗）

EDplace